

曲目解説

ウェーバー(1786-1826)の歌劇「魔弾の射手」は、1820年に完成され、序曲のみ全曲に先駆けて同年10月コペンハーゲンで初演された。この歌劇は、ロマン主義時代の音楽の初の歌劇とみなされている。モーツァルト、ウェーバー、そしてヴァーグナーと続くドイツ歌劇の正統の系譜上に位置付けられる歌劇「魔弾の射手」は、ロマン主義の時代にあつて「純ドイツ的」であると見なされがちであるが、ポロネーズのリズムやナポリ風のアリアも含まれていて、汎ヨーロッパ的なものを包容している音楽ということが出来る。

フォーレ(1845-1924)のパヴァーヌは、1887年に完成されたもので、もとは合唱曲であり、「管弦楽とアド・リブの合唱のための楽曲」であった。1887年という年は、フォーレが自身の代表作であるレクイエムニ短調に着手した年である。普通、彼の創作期を4つの時期に分けるが、その第2期と第3期の過渡期(1885-1889)にこのパヴァーヌは作曲されたことになる。つまり第2期の傾向である、広く深い意味での様式美に支えられつつ、第3期の傾向の、和声の絶妙さとリズムの精緻さに向うという創作的な側面での彼の成熟の一段階にある作品ということが出来る。

モーツァルト(1756-1791)の交響曲第36番ハ長調「リンツ」は、1783年10月から11月にかけて、旅行途中の街リンツで作曲され、同年11月4日にリンツの劇場で初演されている。わずかな期間で作曲された名作として認められる曲の一つであり、同時に初めてモーツァルト自身が交響曲を意図して作曲した曲でもある。アダージョの序奏がある点を含めて、全体を通じての形式はハイドンの影響下にあると言ってもよいが、時折短調が挿入されるという調性感覚やホルンと木管群の音色の組み合わせ方法には、モーツァルトの独自のものが多く、この点では逆にハイドンのこれ以降の交響曲に足跡を残していると言ってもよいだろう。

ドボルザーク(1841-1904)の交響曲第8番ト長調は、1889年8月10日に着想され、9月6日に着手され、わずか3週間にもならない9月23日に完成されたと記録にある。同年11月8日にはスコアが完成され、翌年1890年2月2日にプラハでドボルザーク自身の指揮で初演された。ドボルザーク48歳の遅い春を謳歌していた年である。オーストリアの分国としてのベーメン(ボヘミア)に生まれ、肉屋の伴として育ち、恵まれたとは決して言うことのできない音楽教育環境の中で、彼はなぜここまで独創的な世界を作り上げられたのであろうか。逆説的に言うならば、だからこそ当時のウィーンやロンドン、パリにはなかった音楽を発案できたのかも知れない。後の交響曲第9番「新世界より」に比べると、より透明度の高いベーメンの民族性を示す音を彼はここで作り上げている。そして全楽章は、ベーメン農民の一生涯の四季を映し出しているようにも聞こえる。第1楽章の冒頭のテーマは、チェロとクラリネット、そしてホルンによって奏されるが、ト短調(長調ではない)と変ロ長調の間を彷徨いながら進行する。ヨーロッパの中心的な調性感覚を主体として見れば、これは内面的な意志力の表現として聞きとれるが、まさにこれがベーメン風なのであり、ベーメン民族主義の体現された音なのである。続く第2、第3、そして終楽章を通じて、形式的にもロマン主義的な奔放さを満載しているが、それでもなお冗漫にならない統一性と、旋律の意志力はそこにベーメンの民族のしたたかさが底流にあるからなのである。それともドボルザークの天才の部分と言うべきであらうか。変奏曲形式で書かれた終楽章は、見事に民族性を表出している。全体はテーマが2回、変奏が16回奏されていて、ベーメン農民の冬季は斯までに華ばなく終わる。

(藤井部 勉)